

口腔衛生学会誌 2019年7月号(P164)

シンポジウム8：フッ化物応用をめぐる誤解を解く
(フッ化物応用委員会企画)

座長：眞木吉信（東京歯科大学衛生学講座）

相田 潤（東北大学大学院歯学研究科国際歯科保健学分野）

演者：高橋信博（東北大学大学院歯学研究科口腔生物学講座口腔生化学分野）

瀧口俊一（宮崎県延岡保健所所長・全国保健所長会理事）

鶴本明久（鶴見大学歯学部地域歯科保健学教室）

近年、フッ化物に関してミスリードするような報道が歯科の業界新聞で頻繁に出されている。こうした動きは、「フッ化物塗布が保険診療から外される」、「フッ化物配合歯磨剤の販売が禁止される」といったことを現実にしかねない。実際ネガティブキャンペーンにより、子宮頸がんワクチン接種は「積極的な接種勧奨の差し控え」に追い込まれほとんど接種されなくなった。現在、日本産婦人科学会は防げるはずのリスクの増大に警鐘を鳴らし、再開を要望している。フッ化物についても、こうなってからでは遅い。そのため本シンポジウムでは3名の専門家の方々に業界新聞での報道内容の誤りについて科学的見地から解説を行っていただいた。まず高橋信博先生からは、フッ化物が酸性

環境にある胃で体内に取り込まれる際にフッ化水素になることは「古くから知られている吸収メカニズム」であること、フッ化水素は細胞や血液中などの中性～弱アルカリ性の環境に入ると直ちに乖離されてその濃度は極めて薄くなること、歯科用フッ化物は濃度が低く「腐食性をもつ強酸であるフッ酸」になる可能性はなく安全であることなどをお話しいただいた。瀧口俊一先生からは、フッ化物がIQを低下させないことを、さまざまな地域で複数の時点で実施されたレビューや研究をご紹介いただき、確認した。またIQを低下させるとした研究の問題点についても解説をいただいた。鶴本明久先生からは、フッ化物応用に関して誤った情報が意図的に流されている実態についてご紹介をいただき、そうした情報がフッ化物洗口の実施を妨げていることなどを解説いただいた。そして歯科界としてこうした意図的な誤った情報と対峙していく必要があることをお話しいただいた。実際に海外では誤解を与えかねない情報に対して、学会や歯科医師会がホームページ上で迅速に対応のコメントを公表している。日本口腔衛生学会もこうした役割を担うべく活動をして行くため、まずは今回のシンポジウムの内容をフッ化物応用委員会からの提言として近くホームページ上に掲載する予定である。